

# 十勝の石黒林太郎と新潟の瓦

千代 肇

## 1. 「開けゆく十勝、浦幌町」を読んで

この春、後藤秀彦氏から「新十勝史」抜刷が送られてきた。いつものことながら地域史にみるアイヌと移住者の問題が断片的であっても論考の中にうかがわれるので、読ませていただいている。

「開けゆく十勝、東部十勝の沿岸、浦幌町」の十勝川の鮭漁のところでは、この地域の開拓が鮭漁を中心としてはじまり、明治8年まで杉浦嘉七が独占していた漁業権が返上されて和人とアイヌによる十勝組合が設立した。この組合には和人42人、アイヌ280人が参加していたが、十勝の漁獵権益をすべて独占していたということで、明治13年には組合解散となつたと書かれていた。この記事の興味は、組合解散の実体と280人も参加していたアイヌ生活権がどのようになつていったのかである。

その後について、明治21年12月に十勝漁業組合が大津に設立され、明治24年8月の「十勝中川二郡漁場継続営業表」の浦幌町関係が309頁に掲載されている。浦幌町の漁業継続営業は、鮭曳網、鮭建網営業が19人、昆布営業1人で漁場は20カ所で、なかでも十勝村17カ所と多い。経営者の氏名からみるとアイヌ名と考えられるのはみあたらなかつた。十勝組合解散のときアイヌの組合参加者87パーセントを考えると十勝組合はアイヌによつて構成されていたともいえる。

「十勝川の鮭漁」を読んで、「大津」と「十勝中川二郡漁場継続営業表」にある「石黒友太郎」と「石黒林太郎」が何故か気になつてならなかつたのである。

## 2. 新潟の石黒と十勝

私ごとになつてしまふが、父千代輝衛は石黒家から養子に入った人で、昭和18年に大沼の大和灰株式会社設立に参加したのも父の兄である函館の石黒亮佐のすすめによるものであった。

伯父石黒亮佐は、瓦業で渡道した人で石黒家は代々が新潟県北蒲原郡笛岡村山崎で窯業を開き、瓦業を営んでいた。二男の亮佐は十勝マッチ工場を開いた新潟石黒林太郎の工場長本間忠八と池田町の機関庫を建設したモヤイ組の監督松嶋熊太郎の招きで、大正11年5月に高島で瓦工場を開いた。素焼の段階では良く仕上がるが、釉薬をかけて最後の工程に入るとヒネたりして失敗し、函館ではセメント瓦製造の石黒工業所を經營し、札幌では豊平神社近くにも工場を開いたが、戦時中に陸軍の軍需工場となつてしまつた。

本間忠次、松島熊太郎は共に石黒の親族にあたり、大津村役場の本間忠衛、釧路大黒堂ハマノ薬舗濱野助二郎もある。伯父の家では年中といつてよいほど鮭が用意されていて大津から送られてくるのだという。大津と石黒家は何故か縁があるので、漁場經營の石黒友太郎、石黒林太郎が新潟県北蒲原郡笛岡村と関係があるかどうか。後藤秀彦氏に問合せたところ、ぎやくに原稿依頼させられてしまう結果となつた。石黒友太郎についてはさだかでない点もあるが、石黒林太郎は新潟県笛岡村出身であることがわかつた。石黒友太郎、石黒林太郎の名は、石黒の祖父などからよく耳にした名前であった。

## 目 次

|                         |      |   |
|-------------------------|------|---|
| 十勝の石黒林太郎と新潟の瓦           | 千代 肇 | 2 |
| ニタトロマップチャシから見たチャシの初源の形態 | 後藤秀彦 | 6 |

写真説明：茂川流布川岸で発見されたイリジュウムを含んだ層 1986年8月にアジアで初めて発見されたこの層は底生有孔虫を含む微化石層を介在させ白亜紀—第三紀の境界となっている（後藤秀彦）

### 3. 『笹岡村誌』と『瓦・水原郷の産業史』

新潟県の水原郷とは、白鳥の瓢湖で全国的に有名な所である。新潟市の南西20kmにあたり、新津から北の新発田寄りに水原がある。千代家は新津に本家があり、水原の分家が我家の先祖の出であるが、瓦の生産地である笹岡村は、水原町から東の五頭山脈に向って4kmほどの所にある。越後平野は水田が広がり、水原も水田地帯であるが、笹岡村は笹神村と改められ、石黒家の山崎は山裾で西が水田地帯、東が山林となって広がっていた。

祖父の石黒家は、山崎でも旧家で瓦業を職人にまかせ、小作人が出入りしていた。小川をはさんだ道路に面する母屋は、格子戸を開けると広い玄関の板の間があって、正面に大きな神棚があり、土間や神棚を囲んで家紋の提灯が並らび、二階の大広間に上る階段にも提灯があった。座敷は客間で、板戸と唐紙をはずすと何10人の会合の場となる。小川の上が渡り廊下で、ガラス戸を開けるとオニヤンマが吹き抜け窓をゆうゆうと行き交い、アユがのぼるのがよくみえた。客が来ないときは、渡り廊下で続く建物に家族がいて、板敷の囲炉裏に祖父がいつも座り、田畠や瓦の職人は、朝夕土間で挨拶をしていた。この板の間は台所とつながり、席敷であるが、ときに職人が招かれて、家族と食事することもあった。仏間、居間、台所、納屋、風呂場、米倉などが軒をつらねていた。隣が常安寺で、瓦製造で功績を残した人達や石黒家の墓があった。山の麓に母衣王神社があつて弘化3年に本殿が新築したとき、大黒屋吉左衛門の瓦が使われていたといわれている。

年貢米を納めるときには大八車が何台も連ねて行列するが、母屋の提灯は、そのときのもので、奥の座敷には十手と大小の刀が置かれていた。

笹岡村山崎は、正徳元（1711）年までは山崎町で山崎駅逓があった。明治36年11月から笹岡村大字山崎となるが、古い村だけに商店も道路に添つて何軒かあって、農家と瓦業者の町でもあった。農家などの跡継ぎは長男で、次男、三男はよほどでない限り、郷里を離れて職につかなくてはならない。成功したり、仕事をするときは、郷里から人を呼んで、一族で事業するならわしは封建的的土地所有制から生れた必然性からといえよう。

川上貞雄氏の『瓦・水原郷の産業史』は、石黒

家直系の石黒忠治氏が大正2年から大正6・7年に書かれた『笹岡村誌（一）』を参考にしたものであるが、「民俗資料調査、瓦家、近世後期に於ける造瓦考」が詳しく述べられ、昭和47年に笹神村教育委員会で笹神村文化財報告として出版されたものである。

笹岡村の瓦の創業は、天明7（1787）年からである。天明の大飢饉は天明3年からはじまり、7年7月に越前国坂井郡芦原の瓦師某が難民として山崎にきて、大黒屋伊之助に助けられて奉公人となった。天明7年の年は江戸・大阪・京都で餓死する者など窮民が続出したが、何年も続いた飢饉は一撥を引き起したほどであった。

瓦師某は、母衣王神社山麓の山畑から良質の粘土を発見した。粘土が瓦や陶器製作に適していたので、大黒屋伊之助の奨めで寛政元（1789）年に窯を築いて瓦や諸陶器類を製造したのが山崎瓦製造のはじまりである。

天保の初め（1830年頃）越前国坂井郡金津の瓦師善助と忠蔵が妻子と共に山崎にきて大黒屋吉左衛門に雇われた。善助は大黒屋の窯業を再建し、忠蔵は宮の下（母衣王神社）に瓦の窯業をはじめた。弘化3（1846）年になると、百姓長七の世話で窯を開いた忠蔵のほか、京都の花野四郎吉（京都大仏門前帝室御用瓦師花野四郎兵衛の子）をはじめ、加賀国、三河国、尾張国の職人がきて、瓦窯業が発展していったのである。

大黒屋伊之助にはじまり、大黒屋吉左衛門のとき事業が拡大した笹岡村山崎は、瓦屋（石黒）真太郎、小杉屋市兵衛、小杉屋忠助や広沢屋瀬兵衛など続々と瓦製造をはじめて、慶応年間にはその数も増して、明治中頃まで瓦工業の発展期をむかえた。この時代背景には新潟港が自由貿易港となって発展し、瓦の需要が高まっていったが、山崎町に限らず、保田・二王寺山下・加茂の諸地方でも瓦製造所が設立していった。

### 4. 十勝漁場と石黒

後藤秀彦氏の“十勝川の鮭漁”の十勝組合の記事に北海道庁殖産部招殖課 明治34年引用がある。「該組合員及ヒ其使役ニ供スル者ノ外ハ絶テ来住セス僅ニ明治十一、二年ノ頃石黒某等の移住アリシノミ」と明治24年の漁場継続営業表の「十勝村海岸二番地、鮭、建網、石黒友太郎」、「十勝村

字昆布刈石北浜、昆布、石黒林太郎」とあり、石黒某は明治11、2年頃に移住したと考えられるのである。

この石黒が新潟県北蒲原郡笹岡村山崎の出身であったと考えたのは『笹岡村誌』と『瓦・水原郷の産業史』からである。

大黒屋吉左衛門の時代である江戸時代の後半は、山崎町に入ると大黒屋当主と人夫取締の長七、徳松に願出なければならなかった。大黒屋が石黒となるのは幕末の嘉永年間で、吉左衛門の世話で窯業を行った善助は、新発田藩御瓦教師として雇わして大黒屋の姓を名乗って石黒善助となり、新発田藩の士族となる。大黒屋は吉左衛門の後に石黒真太郎、石黒林三郎の宗家として石黒友太郎が大黒屋を継ぐが、友太郎は明治25年に農商務大臣の許可を得て北越瓦株式会社を設立したり、明治26年には東京の技師塩原徳太郎を招待して尾張の知多郡常滑から職工を雇入れて煉瓦、土管の製法を改良して製造し、瓦の製法も改良している。

山崎の瓦の窯業も明治17年に能登の七尾から職人を雇入れて、これまでの坊主窯と呼ばれていた丸窯から登り窯にしたのも友太郎であった。

石黒友太郎の分家である石黒林三郎は“北海道に渡り成功して財をなした北海道の実力者である兄林太郎の手引きで北海道旭川師団ができたとき、屋根瓦を請負った。“そのとき職人が多勢出かけ、当地の瓦も運んだ”が、現地でも新に工場を建てて焼いたと『笹岡村誌』に書かれている。

明治・大正に瓦の製造を行っていた笹岡村では大字山崎で10軒、大字笹岡で7軒あるが、山崎の石黒姓は、石黒友太郎、石黒真太郎、石黒林三郎、石黒己之吉の4軒で、石黒真太郎は私の曾祖父にあたる。十勝村字昆布刈石北浜の石黒林太郎は、石黒の分家であるが長男でありながら弟の林三郎に家を継がせている。十勝村海岸二番地の鮭建網、石黒友太郎と石黒宗家の石黒友太郎は同一人物であるかどうか。明らかでないが北越瓦株式会社設立の時はかなり資本力があったと考えられる。

新潟の鮭漁は、村上の三面川の鮭は殿様が殖産に力をそいだことで有名であるが、全国で初めてふ化事業をはじめたところもある。阿賀野川の塩鮭は、水原など近郷では正月に欠かせないものとなっていた。越後など農村地帯では鮭は特別な高価な魚でもあった。

曾祖父の石黒真太郎は、石黒林太郎と共に分家であるが、真太郎は、本家の石黒友太郎とは祖母が姉妹で、新潟で回船問屋をして漁網などを取扱っていた鍵(徳)富三作の子であり、書画骨董に造詣が深く、書家でもあったと私の父が話していた。祖父石黒辰二郎は真太郎に子がなく、真太郎の母の実家である岡田家から養子になっているが、辰二郎の兄辰太郎は新潟で事業をしていた。新潟と笹岡の山崎との距離は約25kmほどで、漁網などを取扱っていた鍵富三作、岡田辰太郎によって新潟の景気、商業経済の情報が常に笹岡に伝えられ窯業の発展を左右したが、石黒林太郎の十勝漁場開拓もこのような背景があった。

蝦夷地と新潟は、北前船による日本海交路によって米が移出され、新潟人の移住も始まるが、安政3（1856）年に新潟の松川弁之助が箱館奉行直轄の開墾地差配と漁場開拓を命ぜられた。開墾地とは北蝦夷地（カラフト）であるが、新潟湊から積出す物品については、表向き箱館奉行所の入用品として仲金免除で、このときから新潟と箱館港の結びつきが密接となり、安政5年に締結した日米修好通商条約は、日本海側の開港地として新潟港があげられる。開港場としての新潟が実際に開港するのは明治2年からであるが、米の产地であり、特に水原郷の米は良質であったため、箱館奉行所に送られていた。

十勝の漁場請負人であった杉浦嘉七と松川弁之助は、箱館地蔵町海面を埋築した松川弁之助と箱館産物会所用達杉浦嘉七の安政6年産物会所倉庫地等敷地埋立て関係するが、杉浦嘉七は蝦夷の海産物、釧路産の石炭、その他の貨物をも取扱っていた。

十勝漁場の石黒友太郎の鮭建網、石黒林太郎の昆布場所であるが、“僅ニ明治十一、二年ノ頃石黒某等ノ移住アリシノミ”からすると、石黒友太郎と石黒林太郎のことであるかも知れない。まだ鮭建網の友太郎と昆布場所の林太郎が笹岡の石黒友太郎と石黒林太郎であるとする確証はないが、石黒林太郎は笹岡出身であり、石黒友太郎の名儀は本家で、実際には石黒林太郎が采配を振っていたのではないかと思う。

大黒屋の石黒宗家、石黒友太郎と石黒真太郎は又従兄弟で、石黒真太郎の実父鍵富三作は、新潟で回船問屋として漁網などを取扱っていた資産家

であった。分家の石黒林太郎が十勝の場所を開くには、かなり資本が必要であつただろうし、本家の石黒友太郎を鮭建網の漁場経営者とすることで、資材と資金の借入れが可能である。この策は、松川弁之助などの箱館や十勝の情報を得ていた鍵富三作によるものであったとも考えるが、関係資料の調査を必要とするものである。

## 5. 新潟笹岡の松前徳利と瓦業

新潟湊は、松川弁之助による箱館奉行の開墾地差配、漁業開拓で仲介金免除に次いで、箱館物産会所から新潟湊に送られる諸産物について、諸大

名の年貢売払い米と同様仲介を片仲として、買い請けた者からだけ仲役銀を徴収したいと伺書を出している。箱館表産物会所ならびに北蝦夷地御直場所より新潟表へ差送る諸物産の仲役金免除である。安政4年からの箱館港と新潟湊の産物交流は急速に高まるが、物品交流のなかで意外と知られていない松前徳利と瓦について触れておきたいと思う。

松下亘氏は、松前徳利を調べに笹神村の川上貞雄氏を訪れているが、このときに笹岡の徳利と瓦が北海道に移入されていたことを知った。川上貞雄氏の「瓦、水原郷の産業史」によるもので、『前徳利』『五稜郭の瓦』『旭川師団の瓦』などが書かれていて、祖先の石黒家に関係した新潟笹岡の瓦が歴史的に北海道と関わっていたのであった。

幕府から蝦夷地開拓の命を受けた松川弁之助は、越後三条の大庄屋に生れて高崎藩兵学者市川一学に兵学を学び、松前福山城設計者である市川一学から蝦夷地の知識を得ていた。安政3年に樺太東海岸と西海岸の直撃場所の差配と漁場開発を命ぜられると本店を箱館に置き、翌年から大船10余隻を備えて事業を進めるが、新潟から蝦夷地に渡った人夫達は焼酎を持ち込んだ。この越後焼酎は人気が高く、年々生産を高めるが、当時は箱館を松前箱館と呼んでいた。松前とは和人の居住している地域の総称で、新潟では箱館や蝦夷地に移出する焼酎を『松前焼酎』と呼んでいたのである。

笹岡の窯業は、江戸時代から終戦後まで栄え、窯業者は51窯業で、山崎が11をしめていた。主に瓦であるが、日用品の陶器である摺鉢、徳利も焼いたが、徳利など日用品の製造は窯業者が限られていた。窯業の発達は、北蒲原郡の五頭山麓古窯

址群にみるように8~9世紀にさかのぼる。

松前徳利の生産は、小林新次郎が卒先して製造にかかり、需要が高まると小林佐七、石黒巳之吉、石黒林太郎の弟である石黒林三郎も徳利生産を行ない、生産高は笹岡村1村で明治12年頃には150万個にのぼり、67,500円にまでなった。この徳利は八合入徳利であったが、明治20年からはガラス製の洋酒瓶が徳利に代って生産されるようになり、7軒もあった徳利製造の窯が姿を消していった。

松前焼酎をもたらした人夫達は笹岡の瓦職人であった。

瓦は古く奈良、三河、能登、上州など産地として知られているが、東北・北海道では耐寒耐雪瓦でなければ一冬で駄目になってしまう。寒地に耐える瓦は、新潟笹岡瓦と珠州の能登瓦であった。瓦窯業は、土練り（土打ち職人）、成形（瓦師）の生瓦造りの過程を職場の衆と呼び、瓦焼工の窯小屋の衆に移される。瓦焼は、窯造りと焼成という重要な部分である。水原郷の瓦窯は平窯で、1窯5~8坪で250~400枚の瓦を焼いたが、登窯になると5~6基の窯が連結して焼かれる。この登窯は中世の地下式登窯や半地下式登窯とは構造が違うものである。窯小屋衆は、窯親方、弟子、人夫からなり、生瓦の配列、焼成の温度、窯の色見と焚き方は窯親方の判断による。温度は1,200~1,300度である。焼成作業は、素焼→素焼出し→クスリ（釉薬）カケ→窯詰→窯積→窯焚→窯止→選別→結束からなり、登窯で素焼窯に入れられる量は連結6基で、2,000~2,500枚であった。

幕末から明治の東北・北海道の屋根は、茅葺が多く、杉皮葺、板葺、屋根に石を乗せていた所が多かった。北海道の瓦屋根は、寺院、役所、蔵にみることができる。製造は弘化4(1847)年能登国珠州の金子利吉が箱館にきて、上磯の茂辺地で瓦を焼いたのが始めといわれている。

箱館奉行所の五稜郭は、安政4年に工事を着工して元治元(1864)年に竣工するが、郭内の庁舎と郭外に役宅などができる、国指定五稜郭の整備事業ではかなりの瓦が出土している。郭内庁舎は江戸の中川伝蔵に請負を命じているが、「瓦、水原郷の産業史」にある『五稜郭の瓦』が発見されている。印の瓦で、笹岡村山崎の石黒友太郎窯名である。北海道では耐寒耐雪瓦でなければ役に立

たず、五稜郭の堀割を請負った松川弁之助によるものと思うが、松川弁之助が関係した弁天台場、地蔵町の箱館産物会所倉庫にも笹岡の瓦が使用されていたと考えられる。

瓦屋根を葺く作業は、屋根葺、屋根葺衆と呼ばれる人達の仕事で、繫葺、土葺、引掛葺があり、大棟、降棟、隅棟の鬼瓦、棟葺、鎧瓦など瓦の種類が30種から40種もあって、特異な屋根の構造によって屋根葺衆は専門職人が要求された。瓦葺は、上打職人・瓦師・鬼師・弟子の職場の衆と窯親方・弟子・人夫の窯小屋の衆による屋根葺衆が担当した。五稜郭の瓦葺も笹岡からかなりの人数がきて長期間滞在したので、この頃に松前徳利に入った焼酎が多量に運び込まれていたのである。

耐寒耐雪の笹岡瓦は、新潟の新発田城、明治2年の旧新潟税関舎など主要建造物にみられ、新潟県内や福島県などに笹岡瓦の製造が広まっていった。青森県では弘前に石黒善太郎が瓦製造をはじめると、北海道では石狩の札幌字月寒に石黒善吉が明治30年に瓦工場を設立し、石狩の砂川では石黒林三郎が明治35年に瓦製造をはじめている。

明治30年頃の札幌は、新潟県人による今井呉服店など瓦屋根店舗も多くなるが、明治33年に旭州師団兵舎ができると、石黒林三郎が屋根瓦を請負った。これは、十勝漁場営業の兄石黒林太郎が手

引きしたもので、林三郎は旭川師団のほか新潟の高田師団兵舎も請負っている。

笹岡瓦の石黒系の焼瓦には、丸石、山石、ちがい山石、角石、丸真の刻印が付けられているのがある。石黒系のほかは宮の下の丸四、山崎の丸一、丸庄、丸甚など窯名による刻印は41を数える。

十勝の石黒林太郎から新潟笹岡の石黒と松前徳利、笹岡の瓦を述べてきたが、新潟の鮭建網が十勝の鮭建網に用いられただけでなく、北洋漁業では函館に新潟出身の製網業者が活躍していた。あまり注目されていなかった北海道の瓦も瓦造りに適した粘土がなく、本州から移入された瓦が多くたが、古建造と瓦の考察に参考となれば幸である。

### 参考文献

- 『新潟市史 資料編2 近世I』 新潟市史編さん近世史部会 平成2年3月  
 『新潟市史 資料編5 近代I』 新潟市史編さん近世史部会 平成2年12月  
 『函館市史 通説編第一巻』 函館市 昭和55年3月  
 川上貞雄「越後・佐渡の古代・中世窯」 『日本やきもの集成 2 東海甲信越』 平凡社 1982年  
 須藤隆仙『函館の歴史』 東洋書院 昭和55年

## ニタトロマップチャシから見たチャシの初源的形態

後 藤 秀 彦

### I

かねてより、チャシに関する調査研究は道内外の研究者によって鋭意進められてきたところであるが、その多くは分布や個別チャシ跡の紹介にとどまり、その機能や変遷、そして歴史的な位置付けに関する研究の数は少ないのが実情である。それは、このチャシに関する研究の歴史が浅く、個別チャシのデータの集積が今日的な課題であったからにほかならないが、そうした中においても初期においても鈴木公雄（1965）や本堂寿一（1977・1978）など道外研究者の研究に見るべきものが多かった。そうした中で、各地域のチャシの実情やいくつかのチャシの発掘データ等が示されるに

及んで多くの論文や一般向けの啓蒙書が出版されるようになり、チャシに関する研究も大きく変わってきたと言える。

この中で、チャシの初源的形態や基本形の抽出については、松田猛（1973）が「発生要因の芽生えは縄繩文期にあり、発生したのは人口の増加した擦文期」と主張し、藤本英夫（1980）が「擦文時代の少なくとも後半」と主張しているほかは目立った主張はない。一方、宇田川洋（1980）は中近世のアイヌ文化を3期に分け、14～15世紀を「前期アイヌ文化」とし、カムイチャシの成立期、16世紀前後を実在のチャシの成立期との見解を示している。